

# 『カワっているかい』

2020/1/19

初稿

ME30-0135J

染谷 颯人

## 「登場人物」

### ・浅羽かな

小学二年生の女の子。  
常にウサギ型AI（らび）と一緒にいる。  
正月ということでおじいちゃんおばあちゃんの家で家族でやってきた。

### ・お祖父ちゃん

浅羽かなのお祖父ちゃん。80歳ぐらい  
機械系統には疎く、身の回りの大抵がアナログ的。

### ・動物型AI（らび）

スマートフォン的な存在で、数十年前に開発されて以来人類の約98パーセントが「利用」している。

基本的に動物の形を模しており、様々なヴァリエーションがある。

浅羽かなの場合はウサギ型AIで、「らび」と名付けている。

○お祖父ちゃんの家(十三時ごろ・縁側)

広めの古い日本家屋、庭側。

縁側をドタドタと走る女の子とウ

サギ型「」の姿。

ゆっくりと歩きながらも追うよう

についていくお祖父ちゃん。

かくれんぼをしている。

かな「あははっ！ 次はお祖父ちゃん  
が鬼さんの番ね！」

楽しそうに足踏みをしながらお祖  
父ちゃんの方を向く。

お祖父ちゃん「お、おお。じゃあ十五  
秒数えるぞ」

かな「ズルしないでちゃんと数えて

よ？かな、前にそれで負けちゃった

もん」

お祖父ちゃん「わあかってるって。ほ  
ら、いーち、にーい、さーん……」

しゃがんで数を数え始める。目を  
伏せる動作と同時にゆっくりと画  
面が暗くなる。

お祖父ちゃん(モノ)「うーむ、今や携  
帯電話すらもああいふ動物型の「」に  
取って代えられつつあるのか。本当  
に、時代の変化というのは激しい。  
わしにはもうさっぱりじゃな」

モノローグの裏でお祖父ちゃんが  
少し遅めに秒数を数える声。

お祖父ちゃん「……じゅーさん、じゅ  
ーし、じゅーご！ お祖父ちゃん見  
つけに行くぞお、どこだあ？」

かなとらび、遠くの方で何か話している声。だが、うまく聞き取れない。

お祖父ちゃん(モノ)「ん？ どうした、もしかしてまだ隠れてないのか？」

声がする方へゆつくりと歩き始める。

○おじいちゃんの家(廊下)

お祖父ちゃん「おや、わしの部屋じゃないか」

廊下の突き当たりにあるお祖父ちゃんの部屋から、かなとらびの声がさっきよりも少しはつきりと聞こえる。  
ドアの取手に手をかけ、カチャリと音を出しながら手前に遅めの速さで開く。

○お祖父ちゃんの家(お祖父ちゃんの部屋)

五畳半の部屋。西側の窓から光が差す。ホコリによって空間全体に小さなきらめき。

壁一面を埋め尽くすほどの本棚。ドア正面の壁際に置かれた木製の机、椅子。

壁には209X年一月と書かれたカレンダーがかかっている。

かな、机の前に立っている。らび、机の上で座っている。

周りには少し古い携帯電話やCDプレイヤー、いくつかの本などが無造作に散らばった状態。

お祖父ちゃん「おおっ。かなったら、こんなところにいたのかい。はい、見つけたよ。ほれ、次は……」

朗らかな顔でかなに話しかける。かな、部屋に入ってきたお祖父ちゃんを見て、嬉しそうな声を上げる。

かな「あっ、お祖父ちゃん！ねえねえ、これってなあに？えっとね、”りっぽーたい”？でね、小さな丸いのがいくつも書いてあるの」

両手のひらにサイコロをいくつか置く。

おじいちゃんに差し出すように見せる。

お祖父ちゃん「おやおや、かなは見たことがないのかい。それはね、『サイコロ』っていうんだ」  
かな「さい、ころ？」

聞きなれない言葉に、お祖父ちゃんの目を見ながらコテンと首をかしげる。

お祖父ちゃん「そう、サイコロ。こうやって投げるとね、その丸い印の書いてある面のどれかが上をむくんだ。その丸の数によって色々決めたることができるんだよ」

かな「へー！面白いねっ。……でも、いまはらびみたいに”代わりになんでも決めてくれるAI”があるん

だから、必要ないよね？ ……あ  
っ、そっか。お祖父ちゃんは持って  
ないんだった。あははっ、おっく  
れてるう！」

無邪気に笑うかな。  
苦い顔をしながらも、一緒に笑う  
お祖父ちゃん。

お祖父ちゃん「ハハハッ……。ま  
あ、確かに必要はないかもしれん  
な。だがな、かな。こういうもの  
でもちゃんと……。」

少し悲しそうな顔をしながら何か  
を話そうとする。  
と同時に、被せるようにしてらび  
がお母さん（の使うA）からのメ  
ッセージを伝える。

らび「カナチャン、オ母サンヨリ。  
『オヤツの準備が出来タヨ、早く来  
ナサイ』 ダッテ」  
かな「おかし！？ やったあ！！！」

かな、嬉しさのあまり手を振り上  
げて万歳をする。  
サイコロがおじいちゃんの足元に  
転がり落ちる。  
らびを抱いて、リビングへ走り去  
っていくかな。

落ちたサイコロを拾うためお祖父  
ちゃんがしゃがむ。  
サイコロの一つを指でつまみ、コ  
ロコロと手で遊ぶ。  
寂しそうな目をしながらぼつりと  
呟く。

お祖父ちゃん「だけど、……だけど  
な。古いものにもちゃんと役割があ  
るんだ。なんでも、新しいものが全  
て良いなんてことはないと思うん  
だ」

○お祖父ちゃんの家（十五時ごろ・リビ  
ング）

リビングのドアが開く。おじい  
ちゃんがやってくる。

リビングにつながるドアを開ける  
と甘いバターの香り。

5人がけの長方形テーブルの上  
はシュークリームとパンケーキが  
並んでいる。

奥の方の席、左側にかな。右隣に  
らびが座っている。

お祖父ちゃん、かなの目の前の席  
に座る。

かな、とても陰しい顔をしながら  
テーブルに並ぶお菓子を見つめ  
る。

お祖父ちゃん「お、二つもあるなんて  
贅沢だなあ。どうしたんだい、か  
な？」

かな「ううん、どっちかしかだめだっ  
てお母さんが言ったの。二つも食べ  
たらお夕飯たべれなくなっちゃうか  
らーって。それでね、どっち食べよ  
うかなあって」

かな、数十秒ほどとても悩む仕草  
をする。

かな「そうだ！　ねーね、らび？どっち食べたらいと思う？」

それを聞いたお祖父ちゃん。少し前のめりになって目を見開く。  
かな、らびを抱えてお菓子の皿の前に座らせる。

らび「分カタ、チョット待ッテテネ」

香箱座りの姿勢から、前足を前にして座る姿勢になる。  
目を閉じる。  
耳をピンと立てる。  
数秒。

らび「カナチャン。今日の摂取カロリー、運動時間、栄養ナドカラ、今日ハシュークリームノ方ガイイト思ウナ」

かな「わかった！　らびが言うならそうする！　ありがとうね！」

嬉しそうにらびの頭を撫でる。  
かな、美味しそうにシュークリームを食べ始める。  
お祖父ちゃん、息を押し殺すようにしてその姿を見る。

かな「あれっ、おじいちゃん食べないの？おいしーよ？」

かな、きよとんとした顔をして首をかしげる。らび、同様に似たような表情をして同じ方向に首を傾ける。

どこか震えるような声をしながら、ちらりとらびの方を見る。

お祖父ちゃん「つつ……わしはいい。  
ほれ、らびにでも食べさせてあげな  
さい」

かな「ええーっ、こんなに美味しいの  
に。わかったよお。はい、ら  
び、どうぞ」

とても悲しそうな声でパンケーキ  
を食べさせるかな。はぐはぐと食  
べ始めるらび。

かな「らび、美味しいね！」  
らび「そうダネ。サスガ、かなの才母  
さんダヨ」

顔を見合わせて声は出さずに笑う  
かな、らび。ふと思い出したよう  
にお祖父ちゃんに話しかける。

かな「……あ、そういえばねお祖父ち  
ゃん。かなね、なんとなく気にな  
ってたことあるんだー」

お祖父ちゃん「なんでも言ってごら  
ん、どうしたんだい？」

かな「えっとね、みんな使ってるのに  
お祖父ちゃんはなんで使ってないの  
かなーって思ったの。らびみたいな  
子を」

お祖父ちゃん、頬をぽりぽりと搔  
きながら言う。

お祖父ちゃん「……ああ、そうだな」

ラビの方を見ながら話し始める。

お祖父ちゃん「確かに、お前の持って  
いるその子は便利だと思うんだ。私  
が今も使っているあの携帯電話がさ



らに発展して、できることの幅が広がった。だがな、私はそんな、機械なんぞにあれこれと決めてもらうほどの必要はないと思っているんだ」

お祖父ちゃん、かなの食べかけのシュークリームに目を移す。

お祖父ちゃん「出来るだけ、自分のことは自分で決めたいもんでなあ。ま、どうしようもない時はあのサイコロを投げたりして”運”に任せる時もあるけどな。ハハハ」

かなからの反応がないことに気づくお祖父ちゃん。

かな、いつの間にからびと遊び始めている。  
ブラッシングや手を使った遊び。  
歌を歌ったり、目から動画を投影するなど。

\* \* \*

○お祖父ちゃんの家（おじいちゃんの部屋・夜）

アナログ時計が映る。

時刻は夜九時少し前を指している。

部屋の扉を開け、廊下に出る。

お祖父ちゃん（モノ）「去年の正月に最後に会ってからもう1年。あの時はこんな時間でも、今よりもっと遊ぶうと言いながらはしゃいでいたのに、今年は静かだなあ……」

二階、かなが寝泊まりしている部屋に続く階段を上る。

お祖父ちゃん（モノ）「少しずつ、少しずつ。孫も大人になっていのじゃな。今日は1日、ずっとそのことをひしひしと感じていた」

階段を登りきるとすぐ目の前の部屋に寝泊まりしている部屋。  
手書きで『かなのおへや』と書かれた 札がかかっている。  
部屋の中から声が聞こえる。

らび「カナ……ン、ソロソ……オ……団……  
入ル時……ヨ」

かな「……れ、もう……な時間……？じ  
ゃあ早……寝な……ね」

○お祖父ちゃんの家（二階・かなが寝泊まりする部屋・夜）

コンコン、とノックをして部屋に入るお祖父ちゃん。

お祖父ちゃん「おお、もう寝るのかい？おばあちゃんがリングを剥いてくれたから、すぐろくでもしながら食べないかと誘おうと思ったのじゃが……。……かな？」

かな、上半身は起こした状態で丁寧に敷かれた布団に入っている。  
らび、かなの足元の方でちょこんと座りお尻の辺りをカナが包むように触れている。

とてもゆっくりと時間をかけて、  
かながお祖父ちゃん側を向く。同  
様にらびも同じ方向を向く。  
かなの目、どこか生氣のない印象  
を与えるような目をしている。白  
い部分に対して、瞳孔がとても大  
きくなっている。

かな「ア。お祖父チャンだ。ウン、そ  
うなンド。らびがネ、もう寝ル時間  
だッテ教えてくれタノ。ダカラネ、  
お祖父チャン、おやすみなサイ」

お祖父ちゃん、持っていたすごろ  
くセツと皿に盛られたリングゴを  
床に落としてしまう。

かなから目が離せないまま、息を  
殺した様子でそれを見つめる。

言い終えると、またゆっくりと元  
の方向を向きなおすかな。  
きっちり九十度戻ると、電池が切  
れたおもちゃのようにぱたりと布  
団に倒れる。

――おわり  
(ペラ 9 枚)